

## 【銀賞】

氏名 = 三島 真歩（岐阜市）

書名 = 幸せの器

著者名 = おぎ ぜんた

題名 = 幸せの器

昨年の冬、桑山紀彦さんの地球のステージという講演を聴いた。桑山さんが世界各地で目の当たりにした貧困や飢餓の現状の映像と語り。そこには、傷つきながらも明るく必死に生きようとする子供達の力強い姿があった。この子供達の「幸せ」って何だろう。私の幸せって何だろう。ずっと考えていた。そんなとき、「幸せの器」という本に出会った。

この本との出会いのきっかけは、

「お姉ちゃん、すっごくいい話があるよ。」と言ってサンタさんからもらった本を妹が貸してくれたことだ。

この本の主人公は、大都会のスラム街で暮らすアイザックという少年だ。アイザックは両親を亡くし、兄や姉と別れた。ある日、スカベンジャーをしながら一人で暮らすサミーと出会う。その後、親に虐待されながらも家族のために懸命に働くアリスという少女にも出会う。様々な境遇の中にある少年少女の生き方からアイザックは真の幸せをつかんでいく。

私の心が揺れ動いた言葉がある。

「幸せはね、小さい器に入れるものなんだよ。小さいとすぐ一杯になって満足するだろう。」幸せはたくさんあったほうがよい。「幸せ」を器に入れるなら大きければ大きいほどよい。こう考えていた私の心は、突然雲になったかのように穏やかで軽くなった。

私達の暮らす日本では、東日本大震災が起きた。人々は、住む家、家族、友達、全てを失った。そして福島、原発事故。放射線の恐怖。住みなれた土地を永遠に追われるかもしれないという人々の不安。やるせない気持ちとともに、私も不安になった。

私は、この本に出会う前、「幸せ」とは何か特別な状況のことであると思っていた。だから厳しく苦しい状況の中で、「幸せ」はやってこないと考えた。しかし違う。この本を読み、「幸せ」はどんな時でも、どんな状況の中にもあると気付いた。

その後、テレビ放送の中で、被災者の笑みを見た。感謝の言葉を聞いた。「幸せ」とは、気づき、感謝すること、決して特別なものではない。自分の周りにも幸せがたくさんある。毎日ご飯が食べられること、学校に行って勉強ができること、相談できる友達がいること、家があること、家族と共に暮らせること。確かに、小さい器に幸せを入れるとすぐに一杯になる。私は、とても幸せな気持ちになった。

これから私には、どんなことが起こるか分からない。しかしどのような状況にあっても、アイザックの言葉を心に響かせ「幸せ」を器に入れていきたい。そして、どんな小さなことにも気づき、感謝できる人になりたいと強く思う。